

## 憧れの人

青木

窓から入ってきた風がパラパラと手元のノートをめくった。進まないレポートとのにらめっこは疲れる。

「ね、お昼はもう決まっている？」

隣に座っている先輩がそう言った。4月に入部してから2カ月経ったが、この先輩とも少しづつ仲良くなれていると感じる。先輩の手元のノートを見ると、私のレポートより難しい内容が書かれていた。

「決まっていますけど、コンビニで適当に済ませようかなって思っています」

「じゃあ、ここ、行ってみない？」

先輩が見せてきたスマートフォンには、大学から近いお蕎麦屋さんが表示されている。最近開店したお店として、周りではちょっとした話題になっていた。

「いいですね！先輩はもう行ったことありますか？」

「いや、行ったことなく。だから行ってみたいなって」  
先輩はいつも食事に誘うとき、自分が行ったことのないところに誘う。年上なら一押しのお店を紹介するのが普通だが、先輩は違うのだ。新しいところと一緒にいき、新しいことを一緒に体験することが好きらしい。

「じゃあ、行こうか」

レポートを部室に置いて、先輩の後に続く。少し軽く

なったバックを持つと、なんだかワクワクした。

\* \* \*

「先輩って、いつも食事に誘ってくれますよね。ご飯屋巡りが趣味なんですか？」

蕎麦を待つ間、気まずい沈黙を消すように質問した。

「……趣味ではないかな。美味しものは好きだよ。でも一人で食事するのは嫌いな」

「へえ」

先輩は優しくも落ち着いた印象だが、偶に不思議な人柄だと感じることもある。というか、妙に距離を感じる話し方なのだ。それでも先輩のことを知りたくなってしまうような魅力があり、なぜか興味をそそられるのだ。もっと仲良くなれば、もっと知れるのだろうか。

「私、先輩みたいになりたいです」

「何の話？部活？」

先輩は首を傾げた。

「いえ。憧れみたいな。先輩って魅力的ですよ」

「そうかな？なんだか照れちゃうな……」

先輩はバツが悪そうに視線をそらした。

それから蕎麦が配膳されるまで、他愛もない話をしたが、もう影のある話し方はされなかった。その日食べた蕎麦は、若竹の匂いがした。